

「薙露」から「薙露行」へ

——夏目漱石における詩と散文——

解 璞

序

夏目漱石の『薙露行』¹⁾は、一見難解な題名を持っているにも関わらず、発表当時から「詩興」のある小説として「大好評を博し」²⁾ていた。例えば、『中央公論』の「二百号に対する新聞雑誌の評」³⁾には、『薙露行』のみ獨り異彩を放つ「詩の如き小説」(萬朝報)、「今日二百号を手にし得るや、吾人の眼は先づ此の『薙露行』に向つて最も鋭敏に注がれ」、「此編を再読して尚詩興の津津たるを禁ずる能はざりき」(九州日日新聞)等が見られる。

ところが、戦後『薙露行』が「多くの読者を獲得して」⁴⁾いなかっただという誤解から出発した論考等⁵⁾もある。

その原因は、主として題名、文体、取材の特異性という三点からきている。文体と取材については、すでに様々な角度から研究されている。それに対し、題名については、まだ十分検討されていないようだ。『夏目漱石事典』(勉誠社 二〇〇〇年七月)、『漱石全集』

第二巻(岩波書店 二〇〇二年五月)の注にも、ごく簡単な説明しか記されていないため、題名と小説の内容とは、ほとんど無関係のように見える。しかし、題名という基本の問題が解決されなければ、この小説のあるべき内容に対する研究もはじまらないのである。

これまでの研究では、『薙露行』の題名について「挽歌」説と「内容無関係」説に分かれ、なかでも、『薙露行』はどのような「挽歌」なのかについて、見解が大きく分かれている。この題名の問題は、江藤淳と大岡昇平との『薙露行』論争(一九七五年～一九七六年)の重要な分岐点の一つにもなっている。

名づけに対する漱石のこだわりは、すでに『吾輩は猫である』、『虞美人草』、『門』等のことでよく知られている。にもかかわらず、これまでの研究状況は、『薙露行』を中心とした漱石初期作品における文学と絵画の異ジャンル間の交渉について研究領域が広がっている」と要約されているように、内容と英文学・西洋の視覚芸術との関係が重要視される。一方、この「謎めい」⁶⁾た題名に関する詳細な論及は、管見の限り存在していない。

本稿は、題名の典拠となった楽府詩「薤露」とその変遷を踏まえつつ、題名の意味、小説の内容との関連を明らかにし、「詩の如き小説」という同時代評のジャンルの視座から考察していくものである。その上で、同時代文学における『薤露行』の位置づけをも試みたい。

一、「薤露」という「挽歌」

従来の『薤露行』論を辿ってみると、それらの多くは、内容を論じてから、それに対応できるように題名を解釈する傾向が見られる。例えば、最も影響力のある『薤露行』論を著した江藤淳は、次のような見解を示している。

字義通りにいうなら、「薤露行」とは挽歌のことである。(中略)「薤露」として次のような語釈が示されている。(一)楽府相和曲の名。古の挽歌。人命のはかなきこと、薤上の露の如きを歌ふ。其の次章を蒿里といひ、其の人死して魂魄、蒿里に歸するを歌ふ。もと漢の田横が自殺し、門人がこれを傷んで作ったものといふ。漢代では因つて喪歌とし、李延年が始めて分つて二となし、王公貴人の喪に薤露を、士大夫庶人の喪には蒿里を用ひた。(中略)彼(漱石)が、「薤露」に対して「蒿里」という対語を思い浮かべていたことも、ほぼ確実といわなければ

ならない。(中略)『薤露行』のなかで、死に、あるいは死を暗示されているのは、エレインとシャロットの女の二人であり、これらはいずれも女性だからである。(『漱石とアーサー王伝説』既出)

ここで江藤淳は、『大漢和辞典』の語釈を踏まえているが、「人命のはかなきこと、薤上の露の如きを歌ふ」という表面的な理解に止まっている。『薤露』に対して『蒿里』という対語を思い浮かべたことも、ほぼ確実といわなければならない」という推測も、それによって暗示された女性の死、さらに嫂に手向ける「挽歌」という結論も、根拠に欠けている。

それに対し、夏目漱石『薤露行』論争において、大岡昇平は江藤淳を批判しつつ、次のような解釈をしている。

「薤露行」の「薤」はニラです、その葉は水仙の葉のように細く立っているので、その葉に宿る露はすぐすべり落ちる。人の命はそのように脆くはかないものだという意味のようです。「行」は漢詩の自由な形式で、杜甫の有名な「兵車行」があります。(中略)三、三、七、七、という自由な形式。「薤露行」は貴人に捧げられた自由形式による挽歌です。(『薤露行』の構造)『小説家夏目漱石』筑摩書房 一九八八年五月)

大岡は、「薙露」の意味から「貴人」（大岡論では「エレイン」を指している）に捧げられたもの、「行」から「自由形式」による挽歌という判断を下している。この解釈の正否は、後に検討するが、江藤論の嫂との関連に対する批判として重要である。

それ以後の論考は、ほとんど江藤論と大岡論との分岐から出発し、各自の論を展開している。例えば、塚本利明氏は、「本来このようにして自殺した田横とその一族とを悼む歌なのである。（中略）これが単に挽歌だったからだけではなく、それぞれの思いのために自ら命を断った人々への挽歌だったからではなからうか」と述べている。

因みに『アーサー王伝説事典』には、夏目漱石『薙露行』を「Dirge」、つまり「挽歌」とした説が定着していることが見られつつ、一体どのような挽歌なのかは、不明なままだ。

そのため、『薙露行』は葬送歌ではない。（中略）振り返ってみると一作一作は恰度『薙上露』のように、原体験にささえられて、『啼けど明朝更に復た落ちん』という詩語そのままに、順々に創造することができた。（中略）このタイトルは語源からみても、また語義からみても、作品の内容にはほとんど関連性がない」という宮井一郎氏の論点も存在している。

二．夏目漱石と「薙露」

『薙露行』の「謎めいた」題名を検討する前、夏目漱石と原典の楽府詩「薙露」との出会いを考察してみたい。山敷和男氏は、「漱石と外国文学 中国文学（漢文学）」では、こう述べている。

明治の作家は、多かれ少なかれ漢文学の素養をもっていた。（中略）ところが、漱石と外国文学というテーマについて考察するとき、ともすれば、その外国文学が、ヨーロッパ文学、ことに英文学にかぎられてしかとらえられかねないという傾向があった。今日ではすっかり訂正されているがこれは、漱石が文壇に出た当時そうであったらしく「新声」の「日露号」（明三八・十）に「柳村と漱石」の一文を寄せた紅児が、こう書いている。「英文学者なるべき主人公の書齋には、金びかギルトトッブの英書などはなく、却りて満棚悉くこれ仏典と漢書とは驚く。」つまり、漱石は文壇に出たころ英文学者として有名であったのだ。そういうえば「薙露行」（明三八・十一）も題は漢文学からとったもの、中味は英文学からとったものである。

漱石は英文学者として『薙露行』を書いたが、その題名は、楽府詩からとったものであった。『薙露行』発表直後、その題名に対し

て質問した読者は何人もいた。例えば、一九〇六年三月二日の川本敏亮宛書簡では、漱石は、追伸の中で「題は古楽府中にある名の由に候御承知の通り『人生は薙上の露の如く晞き易し』と申す語より来り候。無論音にてカイロとよむ積に候」と言い、そして、一九〇六年三月五日の木村秀雄宛書簡では、「拝復薙露行の意は薙露行の通に候 薙露行は古楽府の題名也薙露とは薙上の露。人生は薙上の露の如く晞き易し」と簡単な説明しかしていない。

このように、この中世英詩を題材とした小説は、なぜ漢代の楽府詩を題名としたのかは、謎のままである。両者の関連を考える前に、夏目漱石は、いつどこで原典の「薙露（行）」に出会ったのかを考えてみたい。

楽府詩「薙露」に関する漱石の本は、蔵書目録には見られない。しかし、吉崎一衛氏の「漱石が学んだ『詩文課題』」では、漱石が二松学舎に入学した一八八一（明治十四）年には、『史記』と前後漢書（『漢書』と『後漢書』）が講義されているという。それらの講義内容は次の通りである。

- 三級第一課 唐詩選 皇朝史略 古文真宝 復文
- 二級第三課 孟子 史記 文章規範 三体詩 論語
- 二級第二課 論語 唐宋八家文 前後漢書

ところが、吉崎氏によれば、『史記』と前後漢書が講義されてい

るのは、二級第三課と二級第二課であり、漱石が入っているのは、三級第一課だ。但し、講義された詩文は共通している。しかも、漱石が学習した詩文課題には、一八八一年十月五日に「文 讀刺客傳」、一八八二年三月二十五日に「文 逆取順守説」というものがあるという。それらは、いずれも『史記』に関係している。

そして、『史記・田儋列伝』（『世界文学大系五B 史記』筑摩書房 一九六二年七月）を調べると、「薙露」に関わる主人公田横の故事が記されていることが判明する。以上の事実からみると、漱石は、二松学舎にいた時、つまり十代という若い時期に、楽府詩「薙露」ないしそれに関連する故事を学んだことがほぼ推定できる。だからこそ、書簡では題名について「御承知の通り」や「薙露行の通に候」というように書き、当時の読者にとって自明のものであるはずだと、漱石は考えていたかもしれない。

三、楽府詩としての「薙露」

楽府詩「薙露」には、幾つかのバージョンがある。例えば、『初学記』『古今注』『中華古今注』等では、「露」の上に「朝」の一字が加えられて「朝露」となっている。ここで、比較的信頼性の高い郭茂倩の『樂府詩集』を参照したい。原文は、次の通りである。

薤露 (古辞)

薤上露、何易晞。露晞明朝更復落、人死一去何時歸。

薤の上の露の、何ぞ晞き易き、

露は晞けども明朝 更に復た落ちん

人は死して一たび去らば 何れの時にか帰らん¹⁵

「薤」とは、らっきょうのことだ。明・李時珍『本草綱目』¹⁶によると、「薤叶如金灯叶、差狭而更光。故古人言薤露者、以其光滑难亡之义。(薤は、葉は金燈の葉のやうでやや狭くして更に光る。故に古人は薤露といった。それはその光滑にして埒らぬ意味をいつたのだ。)」という。いわゆる「薤露」は、留まり難い薤の葉にある、晞き易い露のこと。はかない命が、住みにくい世に生きていることのとえである。

岡村貞雄氏の『古楽府の起源と継承』では、「薤露」という題について以下のような説明がなされている。

この時(魏以前、二二〇年以前)の薤露はただ人生の哀歌であって、柝車の歌とは考えられないように思う。(中略)曹操・曹植らの薤露・蒿里の曲に擬した古楽府作品がある。その内容は次に示すように、挽歌的な意味とは結びつかないものである。(中略)曹操、曹植は「薤露」「蒿里」の曲を借りてきて、思う

まま詠史や感懐の詩を作っているが、魏におけるこういう傾向は、薤露、蒿里に限らず、実は他の楽府題についても言うことができる。

楽府詩の「薤露」は、最初の古辞においては本来の意味として用いられているが、以後の作品では題名が同じであっても、必ずしも挽歌的な内容ではなく、感懐や哀愁を表せばよい。そして、アーサー王伝説が繰り返し書き直されたのと同じく、「薤露」(「薤露行」)も時代とともに書き直されたタイトルである。例えば、魏武帝曹操も、その息子である詩人曹植も、同じ題名の詩を詠っている¹⁷。

小説『薤露行』の題名は、前述した漱石自身の解釈からしてみれば、古辞の意味に近いことがわかる。しかし、漱石は書簡の中で詩の前半の意味しか解説していない。典拠としての『シャロットの女』を暗示しているように、詩の後半をも暗示しているのではないか。つまり、題名には、挽歌の意味だけでなく、詩の後半「露晞明朝更復落、人死一去何時歸」という意味も含まれていると考えられる。

後半では、留まり難い薤の葉にある、晞き易い露は、明朝になると、再び空気から葉に落ち、生じてくる。つまり、霜が降りると同時に、露が降り、「露降」になる¹⁸。それに対し、人間は、一度死してこの世を去ってしまったら、いつ生き帰ってくるだろうかと詠い、はかない露さえ明日になると再生できるのに、人間は、なぜ一時的な生命しか持っていないだろうかという詠嘆を表している。

ゆえに、前述した大岡昇平論の「その葉に宿る露はすぐすべり落ちる」という解釈は正しくない。ここでは、人間の命は露のようだが、脆い露よりもはかないことが詠われ、人間と自然との対照した二つの時間が示されている。

ちなみに、「行」という題名のつけ方は、樂府詩（又はそのスタイルをした詩歌）の標識の一つであり、大岡昇平の「三、三、七、七」という自由な形式」という説は、事実無根である。例えば、曹操の『蒿里行』や李白の『長干行』もあるが、何れも大岡のいう「自由形式」ではない。

つまり、「薤露」という「挽歌」は、人間と自然、死と再生を詠ったものであり、吉川幸次郎の『人間詩話』に即していえば、自然は推移しつつ循環する、人間の生命は再び循環することはない、という寓意が含まれている。

四、「薤露」から『薤露行』へ

『薤露行』の題名は、内容とどんな関係にあるのだろうか。

内容面において、漱石の創造が最も集中されたのが、鏡の章であることはいうまでもないだろう。テニソンの原典と鏡の章との比較、特に類似点についてはすでに示唆に富んだ研究がなされてきた。だが、その相違点を注意してみると、漱石の創造がみえてくる。

それらの相違点は、例えば塚本利明が指摘した「鏡は、不吉の予

兆のみを写すとされているのである」という原作にない部分だといえる。しかし、果たして「不吉の予兆」のみで回収できるのだろうか。ここで鏡に写っている情景を具体的に検討したい。

（前略）又あるときは頭より只一枚と思はるゝ真白の上衣被りて、眼口も手足も確と分ちかねたるが、けたましげに鉦打ち鳴らして過ぎるも見ゆる。是は癪をやむ人の前世の業を自ら世に告ぐる、むごき仕打ちなりとシャロットの女は知るすべもあらぬ。（『薤露行』・二）

シャロットの女の織るは不断の絵である。草むらの萌草の厚く茂れる底に、釣鐘の花の沈める様を織るときは、花の影のいつ浮くべしとも見えぬ程の濃き色である。うな原のうねりの中に、雪と散る浪の花を浮かすときは、底知れぬ深さを一枚の薄きに畳む。あるときは黒き地に、燃ゆる焰の色にて十字架を描く。濁世にはびこる罪障の風は、すきまなく天下を吹いて、十字を織れる経緯の目にも入ると覚しく、焰のみは絵を離れて飛ばんとす。薄暗き女の部屋は焚け落つるかど怪しまれて明るい。（『薤露行』・二）

恋の糸と誠の糸を横縦に梭くぐらせば、手を肩に組み合せて天を仰げるマリヤの姿となる。（『薤露行』・二）

テニソンの原典に出てきた「少女」、「少年」、「僧院長」、「騎士」、「恋人」に対し、『薙露行』では「前世の業」、「十字架」、「マリヤ」といった、キリスト教に関する言葉が多く出てきている。そして、テニソンの詩では、絵に織る様子が描かれていない。それに対し漱石は、独創的な絵の風景、しかもキリスト教に関する模様が描かれている。これらの設定は、漱石の英国の留学経験に関係していると同時に、当時日本の文壇状況にも密接な関係があると考えられる。

例えば『薙露行』が発表される直前、一九〇五年十月の『中央公論』には、漱石の「一夜」に関する消息が掲載され、宗教家である網島梁川が、漱石の文学を評価していることがわかる。

漱石氏の「一夜」我中央公論誌上に掲げらるる也、或者は朦朧にして解すべからざると云ふ、或者は無意味なる作なりと云へり、而も目ある者は其価値を知れり。土井晩翠氏は我社に書を寄せて、近時文壇の珍品は漱石君の一夜也と云ひ、網島梁川氏も亦之を激賞して措かず、曰く漱石氏の文名は仄に之を聞きしが、其作を読みしは一夜を以つて初めとす、其飄逸にしてアイロニカルなる處、他人の容易に企及し得ざる妙あり、文名の一代に高きもの故なきにあらずと。(『文壇消息』『中央公論』一九〇五年十月)

同月『中央公論』の「新刊批評」には、網島梁川の『病間録』批

評も載っており、「この書は実に氏自ら身讀體達した人生其物の感慨を書き集めたものである。哲学と宗教と最もよく調和した思想を、詩人的天才の筆を揮うて最もよく書きあらはしたのは即ちこの書である。哲学よりも更に賢き知識と宗教よりも更に大いなる慰藉を詩歌よりも更に美しき文字を以て記したものは此書である」と、この宗教書にある文学的価値が評価されている。

翌十一月、『百合』にも乃帆流の『病間録を読む』という文章があり、「氏の文章、端嚴莊重、詩語燦として口を衝いて出づるものがある。氏は「基督の詩」を論じて莊嚴なる実意識を有すると共にまた縹渺たる美意識を統まにせるものと云つたが、直ちに移して氏の文章に見る事が出来る。誠敬なる信仰は直ちに燦爛たる詩を織り出したのである。「詩より神に之き、神よりして詩に之く詩と神と大源一也(一家言)」とは即これ之を謂ふのである、想ふ、人生最後の批評は詩也、古人は我等を欺かなかつた」と、宗教と詩とを結びつけて評している。

網島梁川の『病間録』は一九〇五年九月東京金尾文淵堂から刊行され、同年十月に五版も出され、書評をまとめた『病間録批評集』も出版された。『病間録批評集』は、前掲の『中央公論』の批評をはじめ、『ホトトギス』、『宗教界』、『明星』、『百合』、『新小説』、『帝國文学』等⁽²⁾広い範囲で大きな反響を巻き起こしたことが分かる。なかでも、文芸誌における『病間録』の紹介や批評が看過できないだろう。つまり、宗教書の読者層と文芸誌の読者層が重なっている

ことが垣間見られ、一九〇五年前後の詩壇と教壇が交差していたことが窺える。

『薙露行』においては、このような宗教的再生を信じている人物として、エレインが挙げられる。河下のエレインは、河元のシャロットの女と同じく、ランスロットのために命を失い、一瞬又は一晩の出会いと別れによって破滅した。そして、日々鏡に向かい、「厭くちよう事のあるをさえ忘れたる」シャロットの女の目には、「霧立つ事も、露置く事もあらざれば、況して裂けんとする虞ありとは夢にだも知らず（二二）」と描かれているが、エレインも同じように描かれている。

今迄は長き命とのみ思へり。よしやいつ迄もと貪る願はなくとも、死ぬと云ふ事は夢にさへ見しためしあらず。束の間の春と思ひあたれる今日となりて、つらく世を観ずれば、日に開く蕾の中にも恨はあり。（二五）

「夢にだも知らず」「夢さえ見しためしあらず」とあるように、両者の死は両方とも思いかけない急死だ。但し、シャロットの女の死は、反復していた日々から取り返しのつかない破滅に向かっている。それに対し、エレインは「罌粟散るを愛しとのみ眺むべからず、散ればこそ又咲く夏もあり」「舟に乗りて他界へ行く」というように、この世の一時的な破滅から循環的な時間に向けている。つまり、

来世におけるエレインの復活が暗示されている。言い換えれば、直線的な時間において、一度破滅した人は、循環的な時間によって救済されることになる。

循環的な時間から直線的な時間へという方向で、破滅した河元のシャロットの女と、直線的な時間から循環的な時間へという方向で、救済を願い、再生が暗示された河下のエレイン。そして、カメロットという人間界における直線的な水の流れと、自然界における水の循環（露の状態変化）に関係する死と再生という、二つの時間の対照は、題名である「薙露」と響きあっているのである。

五. 夏目漱石における詩と散文

前述した山敷和男氏の指摘のように、『薙露行』の題名は楽府詩から、内容はマロリーとテニソンの長詩からとったものだ。ここで、さらに注目したいのは、『薙露行』の題名も内容も、「詩」に基づいたことである。

同じような題名で「薙露」に関係した作品には、宮沢賢治の詩「薙露青」（『春と修羅』第二集）がある。

声のいゝ製糸場の工女たちが
わたくしをあざけるやうに歌って行けば
そのなかにはわたくしの亡くなった妹の声が

たしかに二つも入っている

……あの力いっぱい

細い弱いのでからうたふ女の声だ……

(中略)

水は銀河の投影のやうに地平線までながれ

灰いろはがねのそらの環

……あゝ、いとしくおもふものが

そのまゝどこへ行ってしまったかわからないことが

なんといふいゝことだらう〔……〕

かなしさは空明から降り

黒い鳥の鋭く過ぎるころ

秋の鮎のさびの模様

そらに白く数条わたる

この亡くなって帰ってこない妹への挽歌では、生きている者（工女たち）の声と死んでいる者（妹）の声が重なっており、「銀河」と「水」によって「そらの環」がなっている。死と再生、直線的時間と循環的時間が描かれた点において、『薙露行』のそれに類似している。ただし、「薙露行」は詩の文体で、詩的寓意を表現しているのに対し、漱石の『薙露行』は詩の精神を散文で表現している。

『薙露行』の書かれた一九〇五年、上田敏の第一詩集『海潮音』が出版された。「上田柳村」の欧州近代に於ける象徴詩の翻訳紹介

は、蒲原有明の『春鳥集』とともに「評壇の単調を破った」と評されている。「新詩の気運は、一三年前から多少は色めいて居つたのであるが、昨年（一九〇五）に至つて俄に盛況を見やうとは思はなんだ」とも指摘されている。また、「昨年の文壇で最も栄えたのは詩界で、同時に其盛況は空前のものであつた。殊にそれが寂寞たる散文界と著しい対照をなして居るのは更に興味深い現象と云はねばならぬ」という評も見られる。

ところが、散文界が「寂寞」とした状況のなかで、当時英文学者である漱石は、英詩を翻訳紹介するのではなく、英詩に取材した『薙露行』を散文で書き、漢詩の題名を付した。これらは、漱石の独創といわなければならない。

小説の前書にも書かれたように、本来『薙露行』は、「一部の小説として見ると散漫の譏は免がれぬ」マロリーの物語を「小説に近いものに改めてしもうた」ものであつた。しかも、漱石は、マロリーを「紹介しようというのではない」こと、つまり詩を散文に書き改めるという独創を強調している。

同年八月一日に発表された『戦後文界の趨勢』（『新小説』）では、漱石は、日露戦後における日本社会の物質界と精神界の变化、さらに文界の趨勢について次のように述べている。

今日までは——維新後西洋なるものを知つて以来、西洋との戦争はなかつたのである。然しそれは砲煙彈雨の間に力を角す

るの戦争はなかつたといふまでで、物質上、精神上には平和の戦争のために独立も維持される、文明は倍々盛んになるといふ有様であつた。これは西洋から輸入された文化の庇蔭であつた、が然しこの庇蔭を蒙る上からその報酬として幾分か彼に侵蝕される傾向はあつたのである。(中略)つまり風俗人情の異なつた西洋が主となつて来た。即ちこの平和の戦争には敗北した。

それでその結果が妙な所に来て、西洋には敵はない、何事も西洋を学ばねばならぬ、真似なければならぬといふ觀念——これが年来、今日まで養成された事実かも知れぬ。否、事実以上の感じが起るのは明らかである。(中略)

日本はどこまでも日本である。日本には日本の歴史がある。日本人には日本人の特性がある。あなたがちに西洋を模倣するといふのはいけぬ。西洋ばかりが模範ではない、吾々も模範となり得る。彼に勝てぬといふことはない、かう考へが付いて来る。(中略)我邦の過去には文学としては大なる成功を為したものはないが、これからは成功する。これからは大傑作が製作される。決して西洋に劣けはとらぬ。西洋のに比較され得るもの、いやそれ以上のものを出さねばならぬ。出すことも出来得るといふ……氣概が出て来る。これが反響として国民に自覚され自信される事になるのは自然の勢ひである。でこの趨勢から生れて来る日本の文学は今までとは違つて頗る有望なものなつて来るであらう。

日露戦争勝利という時代背景の中で、漱石は、西洋文学を模倣するのに反して、日本の特性のある文学、しかも日本の「模範となり得る」、「西洋に劣けはとらぬ。西洋のに比較され得るもの、いやそれ以上のものを出さねばならぬ」「大傑作」は、これから製作されることを語っている。

『薙露行』の場合においても、漱石は、英詩を上田敏などのようにそのまま詩集として翻訳するのではなく、あえて西洋かぶれになりがちな文壇の象徴詩紹介の風潮に反して、散文体しかもやや時代遅れな雅文体で、原作である英詩以上の小説を創作しようとしていたといえる。

この問題は、大岡昇平が強調していた、漱石が初期作品を書きはじめた時期(一九〇五年)、「小説」でも「詩」でもない「文」というべきジャンルがあつたということや柄谷行人氏の指摘した、漱石の写生文における「文」の多様性²⁸⁾につながっている。

例えば、柄谷氏は、漱石の写生文の特徴を、従来絵画との関係において論じるのではなく、「言語の多様性の解放²⁹⁾」という点で論じている。そして、「漱石の出发点が『文』であるということは重要である。これはたんに正岡子規や高浜虚子らとの関係によつたものではない。なぜなら、彼はすでに『小説』≠『文学』が先端的であり支配的であることを、日本のみならず西洋の動向から見て熟知していたからであり、その中で『文』を書くことはむしろ反時代的自覚なしにありえないからである」と述べている。

ここで、漱石は「日本のみならず西洋」の動向を「熟知」していたからこそ、「反時代的自覚」で独自の「文」を書くということが指摘されている。確かに『薙露行』はその好例の一だといえる。但し、本稿で論じてきたように、『薙露行』の文体の「反時代」性は、時代に背を向けた消極的なものではなく、西洋の文壇に対抗し、さらに当時の日本文壇の動向に対する積極的な反応だといわなければならない。そして、漱石独自の「模範」を創造するにあたり、その漢文学の素養をも見逃せないのである。

結

これまで『薙露行』はいかに書かれ、どのような材料で書かれた小説であるのかが綿密に研究されてきた。一方、なぜ『薙露行』というやや奇異な題名になり得たのかは明らかにになっていない。しかし、小説の材料と内容を研究するまえに問われなければならないのは、『薙露行』という題名は、そもそも何を意味しているのかという基本の問題だ。というのは、これらの問題がわからなければ、小説のあるべき内容に関する議論もできるはずがないからである。そこで、本稿では『薙露行』という題名から出発し、従来議論されてきた「挽歌」説を踏まえ、原典楽府詩の「薙露」の意味と小説の主題の関連を説明し、さらに、同時代文学との比較を通して同じ「詩興」を散文で表現した漱石の『薙露行』の特異性を指摘した。

日露戦後、西洋の象徴詩が盛んに翻訳紹介された当時の日本の文壇状況において、このような製作は、漱石の独創だといわなければならない。そして、詩と散文のジャンルの融合を最も明確に示したが、その「謎めいた」題名なのである。

『薙露行』において、漱石は西洋文学あるいは視覚芸術を題材とただけではなく、漢詩と英詩との接点を求め、さらに原典の詩を散文で書き改め、詩に凝縮された詩興を散文体のなかに融合し、象徴詩と同工異曲の妙を得ている「詩の如き小説」という、漱石独自の文体を確立したのであろう。

注

- (1) 『中央公論』二百号 一九〇五年十一月。なお、本稿において、楽府詩「薙露」を「」で、漱石の小説『薙露行』を「」で表記し区別する。
- (2) 雪隠(内田百閒)「淡虚集を読む」『山陽新報』一九〇六年六月十一日。また一九〇六年三月三日野村伝四宛はがきには、「僕の薙露行を十二へん読んだ人がある。僕は感謝の手紙ヲ出シタヨ」という文章が見られる。
- (3) 『中央公論』一九〇五年十二月。
- (4) 江藤淳「漱石とアーサー王伝説——『薙露行』の比較文学的研究」(東京大学出版会 一九七五年九月)に、「この作品が、當時すでに反時代的な文体となりつつあった雅文体を主体とした文体で書かれているところが特異であり、アーサー王伝説に取材しているところが特異である。それのみならず、『薙露行』という題名そのものがすでに謎めいて、晦渋をきわめている。」とあり、高宮利之『アーサー王伝説万華鏡』(中央公論社 一九九五年二月)に「その難解な題名と、それにふさわしく難解で濃艶な雅

文体と隠された意味ゆえに、決して多くの読者を獲得してきたというわけにはいかない」とある。

- (5) 『吾輩は猫である』に関しては虚子の提案によって冒頭の一句が題名となったという(『日本近代文学大系 夏目漱石集I』角川書店 一九七一年四月)、『虞美人草一予告』(一九〇七年五月二十八日『東京朝日新聞』)に漱石が買った花を題名にし「聊か虞美人草の由来を述べて、虞美人草の製作に取りかゝる」とあり、小宮豊隆『門』解説(『漱石全集』第四巻 漱石全集刊行会 一九三六年八月)に『門』といふ名前は森田草平と小宮豊隆によるものだとある。以上のことから、漱石は先に題名が決まってそれを生かして執筆する事情が窺える。
- (6) 『夏目漱石事典』勉誠社 二〇〇〇年七月。
- (7) 『漱石とアーサー王伝説』同前。
- (8) 『雑露行』の謎と主題『漱石と英文学』『漢虚集』の比較文学的研究』流彩社 一九九九年四月。
- (9) "SOSEKI, NATSUMI (1867-1916), author of *Kairo-ko: A Dingo, the only major prose resetting of Arthurian themes in Japanese.* NORRIS J. LACY "THE Arthurian ENCYCLOPEDIA" (GARLAND PUBLISHING, INC NEW YORK & LONDON 1986)
- (10) 『夏目漱石の恋』筑摩書房 一九七六年十月。
- (11) 竹盛天雄『夏目漱石必携II』(学燈社「別冊国文学」一四号) 一九八二年五月。
- (12) 『論及』七号 二松学舎大学佐古研究室 一九八三年十一月。
- (13) 徐堅等著『初学記』綾装書局 二〇〇一年、『古今註』崔豹撰 中華古今注／馬縞集・蘇氏演義／蘇鸚鵡』商務印書館 一九五六年。塚本利明『雑露行』の謎と主題』の注にも指摘されているが、具体的な出典が記されていない。
- (14) 郭茂倩『樂府詩集』中華書局 一九七九年。
- (15) 訳は岡村貞雄『古楽府の起源と継承』(白帝社 二〇〇〇年七月)によ

る。

- (16) 李時珍『本草綱目 第三冊』新華書店 一九七八年。
- (17) 鈴木真海訳『国訳本草綱目 第七巻』春陽堂書店 一九三三年五月初刷。一九七九年六月創業百年記念版発行。
- (18) 同前・魏・武帝(曹操)
- 惟漢二十二世、所任誠不良。沐猴而冠帶、知小而謀強。猶豫不敢斷、因狩執君王。白虹為貫日、己亦先受殃。賊臣持國柄、殺主灭宇京。蕩覆帝基業、宗庙以播喪。播越西迁移、号泣而且行。瞻彼洛城郭、微子为哀伤。惟ふに漢の二十二世、任ずる所 誠に良からず／沐猴にして冠帯し、知小にして謀強し／猶予して敢へて断ぜず、狩に因つて君王を執る／白虹 為に日を貫き、己れ亦た先づ殃を受く／賊臣 国柄を持し、主を殺し 宇京を滅す／帝の基業を蕩覆し、宗廟 以て播き喪ぼさる／播越して西に遷移るに、号泣しつづ且行り／彼の洛城の郭を瞻れば、微子 為に哀傷せん。
- 同前 曹植
- 《乐府解題》曰：“曹植擬《雜露行》為《天地》。”
- 天地無窮極、陰陽転相因。人居一世間、忽若風吹塵。愿得展功勤、輸力於明君。懷此王佐才、慷慨獨不群。鱗介尊神龍、走獸宗麒麟。虫獸猶知德、何況於士人。孔氏刪詩書、王業粲已分。騁我徑寸翰、流藻垂華芬。
- 天地 窮極無く、陰陽 転じて相因る／人の一世の間に居るや、忽たること風の塵を吹くが若し／願はくは功勤を展ぶるを得て、力を明君に輸さん／此の王佐の才を懷き、慷慨して独り群せず／鱗介は神龍を尊び、走獸は麒麟を宗とす／虫獸すら猶徳を知る、何ぞ況んや士人に於てをや／孔子 詩書を刪り、王業 粲として已に分かなり／我が徑寸の翰を馳せ、藻を流して華芬を垂れん。
- 訳は岡村貞雄『古楽府の起源と継承』による。因みに同じ題名の漢詩は、晋の張駿によつても詠まれている。
- (19) 落、謂露降。余冠英選注『樂府詩選』人民文学出版社 一九五三年。
- (20) 吉川幸次郎『人間詩話』岩波書店 一九五七年

(21) 江藤淳『漱石とアーサー王伝説』、高宮利行『アーサー王伝説万華鏡』、
尹相仁『世紀末と漱石』(岩波書店 一九九四年二月)等の論がある。

(22) 『ホトトギス』(一九〇五年十月十日)、『宗教界』(一九〇五年十月)、
『早稲田大学文学教育科講義』(二年、一九〇五年十月)、『早稲田大学歴
史地理科講義』(第一年第一号、一九〇五年十月)、『慶應義塾大学学報』
(一九〇五年十月)、『東京日々新聞』(一九〇五年十月十六日)、『東京毎日
新聞』(一九〇五年十月二十日)、『明星』(第十一号、一九〇五年十一月)、
『白百合』(一九〇五年十一月)、『新小説』(一九〇五年十一月)、『時代思
潮』(一九〇五年十一月)、『基督教世界』(一九〇五年十一月)、『家庭新聞』
(一九〇六年一月二十一日)、『帝國文学』(一九〇六年二月)等。

(23) この論点について、拙論「鏡と時間——『薙露行』の第二章を中心に——」
『文藝と批評』第十卷第九号(二〇〇九年五月)で詳細に検討されている。
但し、キリスト教に関する具体的な展開がなされていないので、本稿では

さらに検討してみた。

(24) 「三十八年の詩界」『白百合』一九〇六年一月。

(25) 『小説家夏目漱石』同前。

(26) 「漱石とジャンル」(群像)一九九〇年一月号)、「漱石と『文』」(群像)
一九九〇年五月号)

(27) 柄谷行人・小森陽一対談「漱石——想像界としての写生文」『國文学』
一九九二年五月号。

(28) 「漱石とジャンル」同前。

* 本稿の傍線は、引用者に拠るものであり、傍点は原文に拠るものがある。引
用は岩波版『漱石全集 第二巻』(二〇〇二年五月)に拠る。尚、旧字は
適宜新字に改め、ルビも一部を除いて省略した。